2024年　第９号

衛生委員会だより～がん検診編～

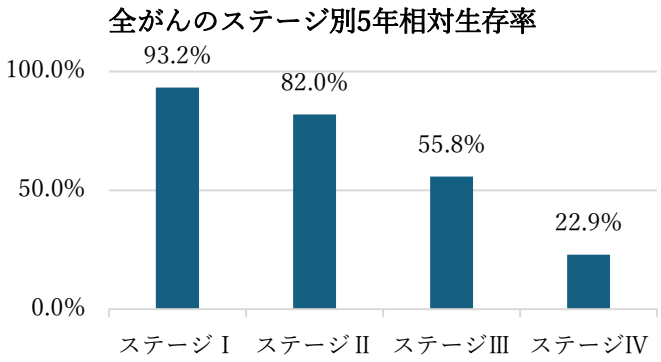
がんは２人に１人がかかる病気です

日本では、生涯で２人に１人ががんになり、年間で３人に１人はがんで亡くなっています。がんは**「早期発見・早期治療」**が重要で、それにより生存率が大きく変わってきます。

がん検診を受けることで、自覚症状が現れる前に**早期で発見することができる**可能性が高まります。

また、がんになる前の病変（子宮頸部異形上皮・大腸腺腫(ポリープ)など）を発見し治療することで、**がんになることを防ぐ**ことができます。

一方で、「偽陰性(がんを見逃してしまうこと)」、「偽陽性・過剰診断(要精密検査と診断されてもがんではなく、結果的に不必要な治療や検査を招く)」というデメリットもあります。



がん検診を受ける際には、メリット・デメリットをよく理解しておくことが大切です。

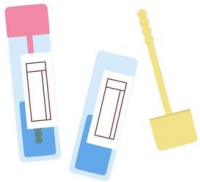
「胃がん」「肺がん」「乳がん」「子宮頸がん」「大腸がん」の５つのがんは検診を受けて早期発見・早期治療を行うことによって死亡率が低下すると科学的に証明されており、がん検診の有効性が高いとして実施されています。

がん検診の種類	検診方法	対象年齢	検診間隔
胃がん検診	問診、胃X線検査 または胃内視鏡検査	50歳以上 ※胃部X線検査は40歳以上に対し実施可	2年に1回 ※胃部X線検査は毎年実施可
大腸がん検診	問診、便潜血検査	40歳以上	毎年
肺がん検診	質問（問診）、胸部X線検査、喀痰細胞診（対象該当者）		
乳がん検診	問診及び乳房エックス線検査（マンモグラフィ） ※視診、触診は推奨しない		2年に1回
子宮頸がん検診	問診、視診、細胞診	20歳以上	
	問診、視診 HPV検査単独法 （市区町村が導入した場合に限り適用されます）	30歳以上	5年に1回 （追跡検査対象者は１年後に受診）

対象年齢・検診間隔をCHECK!

それぞれの検診間隔を守り、定期的に受けることを心がけましょう。

【がん検診でどれくらいの人ががんと診断されるの？】



大腸がん検診受診者
10000人

→

要精密検査
約600人

→

大腸がん
罹患者
約17人

大腸がん検診を例にみると、受診者 1 万人あたり約 600 人（6%）が要精密検査と診断され、その内精密検査を受けて大腸がんと診断されるのは約 17 人（2.8%）です。つまり、要精密検査と診断されても、必ずしも大腸がんであるというわけではなく、異常がない方やその他の疾患である場合などがほとんどです。一方で、要精密検査者の中には、精密検査を受けずに放置している方も含まれており、がんに気づくことができていません。

がん検診で「要精密検査」と言われても、怖がり過ぎず
放置せずきちんと精密検査を受けましょう。

【がん検診はどうやって受けるの？】

「職場」でのがん検診

働いている人は、職場で年 1 回実施されている定期健診と同時期にがん検診も実施されていることがあります。実施項目や時期、料金などは職場によって様々なので、ご自身の職場で確認してみてください。職場で実施されていない場合は、市町村のがん検診を受けるようにしましょう。

↓

- **職場で実施されていない場合・・・**
- **働いていない場合・・・**

「市町村」でのがん検診

住んでいる市町村が実施しているがん検診です。自宅に案内が送られてくるか、市町村が発行している広報誌やホームページに記載されていることがあります。実施時期が決まっていますので、気づかずに終わってしまっていることのないよう、ご自身でしっかり確認しましょう。

【引用・参考】
・日本医師会　知っておきたいがん検診（med.or.jp）
・最新がん統計：[国立がん研究センター　がん統計] (ganjoho.jp)
・がんの統計 2021：[国立がん研究センター　がん情報サービス　一般の方へ] (ganjoho.jp)